



👁️👁️ みどころ

韓国では制服組の軍人が背広に着替えれば、軍需部品の購入に責任を持つ国防部の官僚に転身できることにビックリだが、軍需産業と国防部の不正、癒着は万国共通・・・？しかし、そんなことで戦闘機が墜落したのではパイロットはもとより、国家全体の損失だ。

しかして、強大な国家組織はトヨタを見習って(?) 常に改善を重ねることが不可欠だが、風通しの悪い職場では、そんな“正論”はかえって邪魔にされ、抹殺されることに・・・。

すると、最後は内部告発しかないが、アル・パチーノとラッセル・クロウが演じた『インサイダー』(99年)のような展開は韓国でも可能なの？

その対比も含めて、あっと驚く本作の内部告発の姿はじっくりと。

———— * ——— * ——— * ——— * ——— * ——— * ——— * ——— * ——— * ——— * ———

■□■韓国で実際に起きた軍の不正・汚職事件が映画に！■□■

韓国陸軍の軍人で中佐のパク・デイク(キム・サンギョン)は、ある日、基地勤務から念願の国防部へ異動。軍需本部の部品購買課の課長というエリートコースへの辞令が出たから、妻子と共に大喜びだ。直属上司のチョン將軍(チェ・ムソン)の信頼は厚いうえ、部下たちからの信頼も厚く、ここはまさに“家族”同様の楽しい職場。そう思いながら、パクは膨大な金額が動く軍航空機の部品の買い付けを中心とする業務に張り切って邁進していた。

しかし、ある日戦闘機乗りのカン大尉(チョン・イル)から、搭乗する機の操舵制御装置が外資エアスター社のクズ同然の代物で、国産の物と取り換えてほしいとの陳情を受け

ることに。そこで調べてみると、エアスター社製の航空部品だけは他社と競合させることなく大量に採用されており、その購入価格も原価の何百倍もの値段であることがわかったから、アレレ。しかも、これはチョン將軍がエアスター社から多額の賄賂を受け取って便宜を図っているらしい。自分の職場がそんな汚職の温床になっているとは！そんなバカな！

■□■韓国では現役軍人が中央官僚の役割を！■□■

朝鮮戦争終了後の朝鮮半島は南北に分断されたが、今や政治、経済、社会面における北朝鮮に対する韓国の優位は明確になっている。しかし、その民主化や経済成長の過程は決して順風満帆だったわけではないし、よくよく考えてみると、韓国の政治体制は、日本に比べると不安定さが目立っている。韓国映画の特徴の1つは南北分断問題や、そこでのスパイ抗争をテーマとした素晴らしい映画が多いことだが、本作のような韓国軍の不正、汚職問題を真正面から扱った映画は珍しい。多分、本作がはじめてだろう。

日本では最近、小泉新次郎氏がしきりに“国会改革”を唱えて野党の横断的な組織作りを目指しているが、本作を観て私が最初に驚いたのは、パクのような制服組の現役軍人が国防部品購買課の課長というエリート官僚職に、制服からスーツに着替えるだけで異動していることだ。日本では、自衛隊を軍隊と呼ぶかどうかは別として、制服組と行政各部署の実務を司る官僚組はまったく別組織で、両者が自由に交流することはありえない。そのため、財務省をはじめとする中央官庁の中央官僚は大きな権力を持っている。そんな制度が、軍部（自衛隊）や制服組の力が巨大化することを防ぎ、かつ効率的な行政にも役立っているのだが、その反面、近時のような中央官僚の不祥事を次々と生むことにも……。そう考えると、韓国で本作のような不正、汚職事件が起きたのは、人間の問題はあるものの、それ以前に制度上の欠陥があるのでは……？

■□■内部告発者になる決断は？■□■

パクは何よりも国家への忠誠心を大切にする軍人の鑑のような男だから、一人娘も「自分は大きくなったらお父さんと同じような軍人になるんだ」という夢を持つほどの自慢の父親だった。そのため、国防部品購買課の課長としての仕事も、国家への忠誠を第一義として励んでいたから、エアスター社製品への疑惑や価格上の疑惑が判明すれば、それを正そうとしたのは当然。しかし、パクと同僚のナム・ソンホ課長（チェ・グィファ）や、パクの部下であるファン主任（キム・ビョンチョル）はそんなパクの動きをやんわりと牽制……。普通はそこで同僚や部下たちの配慮に気付き、いろいろと“忖度”するのかもしれないが、国家への忠誠第一のパクにとっては、不正は不正、間違いは間違い、とばかりにチョン將軍に問題点を報告し、改善の方向を提示。それに対して、チョン將軍は……？

本作中盤は、そんな部品購買課全体とその上部組織である国防部全体の仕事の流れの中

で、パクが発見した不正、癒着を改善すべく悪戦苦闘する姿が描かれる。しかし、これはひょっとして、エアスター社のロビイストの美女、キャサリン（ユソン）と頻りに接触しているチョン将軍が言うように、木を見て森を見ないもの？確かにそう言えなくもないが、さて・・・？

7月10日の夜、NHKBSプレミアムでは『インサイダー』（99年）が放映される。これはラッセル・クロウ扮する一方の主人公がタバコの有害性を告発するインサイダーになる姿と、自らの番組でのその放映中止を決定されたもう一方のアル・パチーノ扮する主人公もテレビ局を告発するインサイダーになるという素晴らしい社会問題提起作だった（『シネマ1』46頁）。同作中盤では、全く違う職種の2人の男がなぜ2人ともインサイダーになる決断を固めたのかについて説得力のあるドラマが展開されたが、さて本作の主人公パクは、インサイダーになる決意をどのように固めるの？パクが最初に軍法務官のチョン・イングク（シン・スンファン）に接触したのは当然だが、さて、軍法務官による“内部統制”の実力は？

韓国の職場は日本以上に家族的で、飲み会や食事会による結束固めが重視されていることが本作を観ているとよくわかるが、そんな誘惑（？）と迷い（？）の中、パクの決断は？

■□■テレビ局は？女性記者の支援は？■□■

日本大学のアメフトの危険タックル事件では、監督の内田正人氏と違反タックルをした選手がそれぞれ素顔でテレビの画面上に登場した時点で、善玉 v s 悪玉の色分けがされてしまった。しかし、パクにとってはエアスター社の不正、癒着を改善することが国家への忠誠心に基づく目的だから、自分の顔を生でテレビ画面に出す予定は全くなし。そのことは、テレビ局の女記者、ジョンスク（キム・オクビン）がパクのインタビューを録音する際の用心深い対応を見れば明らかだ。しかし、パクの動きを知ったチョン将軍がさまざまな妨害工作を仕掛けたことによって、逆にパクの軍務違反が暴露されたり、インサイダー情報の根拠の無さが暴露されてくると、テレビ局の上層部の判断は・・・？

そこに見る風景は『インサイダー』で見たものと全く同じだから、内部告発の難しさはアメリカでも韓国でも同じだということがよくわかる。エアスター社との不正、癒着を含む、国防部の“一級機密書類”はすべてチョン将軍の部屋の金庫の中に収められていたが、内部告発のためには客観的な物証としてそれを盗み出す必要があるの？そうすると、『ペンタゴン・ペーパーズ 最高機密文書』（『シネマ41』37頁）の世界と同じだが、そんなことが可能なの？

本作のクライマックスに向けては、「もはや失うものは何もない」と覚悟を決めてテレビの生番組へ、実名と素顔での出演を了解したうえ、“一級機密書類”を巡る“ある作戦”の下で、テレビ局のスタジオに向かうパクの姿が登場する。パクのテレビへの生出演による内部告発を何としても阻止しようとするチョン将軍やナム課長は必死にパクの所在を調査

し、パクを逮捕しようとしていたから、パクがテレビ局の前に現れると、ひと安心。「これで我々の勝ちだ」と確信したが、さあ、その後のドンデン返しは？コトがこれほど鮮やかに決まればまさに「快感！」だが、ハリウッド版『インサイダー』とは少し異質の、韓国版『一級機密』の結末はあなた自身の目でしっかり確認してもらいたい。

2018（平成30）年7月12日記